

曹丕に擬えられる長屋王像を巡って

——長屋王宅詩宴詩における建安期曹丕関連詩宴詩表現の受容——

林 宇

はじめに

山田三方「秋日於長王宅宴新羅客」詩詩序（以下「山田三方詩序」と略す）は、五二番詩が詠まれた場で、それに先行して作られた詩序である。多くの表現を含む山田三方詩序には、その詩序が創作された詩宴を読み解く鍵が秘められている。まず、山田三方詩序の本^①文と書き下し文を次に掲げたい。

山田三方「秋日於長王宅宴新羅客」詩詩序

ア君王以敬愛之冲衿、広闢琴樽之賞。

使人承敦厚之榮命、欣戴鳳鸞之儀。

於是イ琳琅滿目、蘿薜充筵。

玉組雕華、列星光於煙幕、珍羞錯味、分綺色於霞帷。

羽爵騰飛、混賓主於浮蟻、ウ清談振発、忘貴賤於窓鷄。

歌臺落塵、郢曲与巴音雜響。笑林開鬢、珠輝共霞影相依。

于時露凝旻序、風軫商郊。寒蟬唱而柳葉飄、霜雁度而蘆花落。

小山丹桂、エ流彩別愁之篇、才長坂紫蘭、散馥同心之翼。

日云暮矣、月將除焉。

醉我以五千之文、力既舞蹈於飽德之地、

博我以三百之什、且狂簡於叙志之場。

キ清写西園之遊、兼陳南浦之送。含毫振藻式贊高風云爾。

（君王は敬愛の冲衿を以て、広く琴樽の賞を闢く。使人は敦厚の榮命を承け、欣び鳳鸞の儀を戴く。是に於て琳琅目に満ち、

蘿薜筵に充つ。玉組華を雕りて、星光を煙幕に列べ、珍羞味を

錯へ、綺色を霞帷に分かつ。羽爵騰飛して、賓主を浮蟻に混へ、

清談振発して、貴賤を窓鷄に忘る。歌臺塵を落とし、郢曲は巴

音と雜り響き、笑林鬢を開き、珠輝は霞影と共に相依る。時に

露は旻序に凝り、風は商郊に転る。寒蟬唱ひて柳葉漂り、霜

雁度りて蘆花落つ。小山の丹桂、彩を別愁の篇に流し、長坂の

紫蘭、馥を同心の翼に散らす。日は云に暮れ、月は將に除かむとす。我を酔はしむるに五千の文を以てして、既に飽徳の地に舞踏し、我を博むるに三百の什を以てして、且つ叙志の場に狂簡す。西園の遊びを清写し、兼ねて南浦の送りを陳ぶ。毫を含みて藻を振るひ、式ちて高風を贊むるぞ。」

山田三方詩序の一部表現には、明らかに曹植「公讌」詩を踏まえたと思しい表現が確認される。

公讌詩

ク公子敬愛客、ケ終宴不知疲。コ清夜遊西園、飛蓋相追隨。

明月澄清景、列宿正參差。サ秋蘭被長坂、朱華冒綠池。

潜魚躍清波、好鳥鳴高枝。神飊接丹轂、輕輦隨風移。

飄飄放志意、千秋長若斯。

(公子客を敬愛し、宴を終るまで疲るるを知らず。清夜に西園に遊び、蓋を飛ばして相追隨す。明月に清景澄み、列宿正に參差たり。秋蘭は長坂を被ひ、朱華は緑池を冒ふ。潜魚は清波に躍り、好鳥は高枝に鳴く。神飊は丹轂に接はり、輕輦は風に隨つて移る。飄飄として志意を放にし、千秋長へに斯の若くならん。)

(『文選』卷二〇)

曹植「公讌」詩を踏まえたと思われる部分とは、傍線ア「君王以

敬愛之冲衿」、傍線オ「長坂紫蘭」、傍線キ「清写西園之遊」の三句のことである。曹植「公讌」詩は『文選』に収録される一作で、「公讌」詩が詠作された宴の主催者を指す表現である「公子」の李善注に、「公子、謂文帝、時武帝在、謂五官中郎也。(公子は、文帝を謂ふ、時に武帝在り、五官中郎と謂ふ。)」とあるように、「公子」は後の魏文帝で、「公讌」詩が詠作された当時は五官中郎であつた曹丕を指す。一首は曹植が兄曹丕主催の詩宴に列席した際の作である。

山田三方詩序の傍線ア・オ・キが、曹植「公讌」詩の傍線ク・サ・コをそれぞれ踏まえていることは、一目して了解されよう。

このような曹植「公讌」詩受容の傾向は、懷風藻中において山田三方詩序以外の作にも確認されるのか。また、山田三方詩序は如何なる理由で「公讌」詩受容を行つたのか。本論文では、懷風藻詩の曹植「公讌」詩受容を手がかりに、「長屋王宅詩宴詩」に反映される「長屋王像」を明らかにしてみたい。

一 懷風藻詩に見られる曹植「公讌」詩受容

山田三方詩序では、どのように曹植「公讌」詩受容を行っているかを具体的に見てみたい。山田三方詩序の傍線ア「君王以敬愛之冲衿」は「公讌」詩の傍線ク「公子敬愛客」を踏まえ、貴族の子であることを意味する「公子」という表現を「君王」に置き換えた表現となっている。「君王」は、漢籍では天子や諸侯・諸王を指す表現

として用いられ、『日本書紀』では天皇や皇親の意で用いられている。長屋王が皇親であった事実を考慮すれば、山田三方は意図的に「公讌」詩の「公子」という表現を、皇親の意である「君王」に置き換えたものと思われる。そして、「公子敬愛」の受容を以って、長屋王を、客人を手厚く招いた曹丕に重ねているのである。

次に傍線オ「長坂紫蘭」は、「公讌」詩の傍線サ「秋蘭被長坂」の一句を意識したもので、長屋王宅で催された詩宴が「公讌」詩の情景に匹敵するものと捉える意識がうかがえる。また、その背後には、「長屋王宅詩宴」に列席する主人と賓客を、曹丕とその周辺の文人たちに擬える意図が確認される。続いて傍線キ「清写西園之遊」は傍線コ「清夜遊西園」を意識したもので、山田三方詩序の「遊」は「西園」で行った遊びの意で、「公讌」詩の「遊」は出かけるという意を兼ねた「西園」に赴いて遊ぶ意でやや異なるが、文字の重なりは明らかで、「西園」を用いて「公讌」詩が描く曹丕主催の詩宴に、目前の長屋王主催の詩宴を重ねていることは明白である。

曹植「公讌」詩の受容は、他の「長屋王宅詩宴詩」にも認められる。

田中浄足「晩秋於長王宅宴」詩（六六番、以下田中浄足詩と略す）にも、曹植「公讌」詩を踏まえた痕跡がうかがえる。田中浄足詩の⁽³⁾本文は次のとおりである。

田中浄足「晩秋於長王宅宴」詩（六六番）

苒苒秋云暮、飄飄葉已涼。シ西園開曲席、ス東閣引珪璋。

水底遊鱗戲、巖前菊氣芳。セ君侯愛客日、ソ霞色泛鸞觴。

（苒苒秋云に暮れ、飄々葉已に涼し。西園曲席を開き、東閣珪璋を引く。水底に遊鱗戯れ、巖前に菊氣芳し。君侯客を愛づる日、霞色鸞觴に泛かぶ。）

田中浄足詩の表現を見ると、第七句目の傍線セ「君侯愛客日」は、明らかに曹植「公讌」詩の傍線ク「公子敬愛客」を受容したと思しい表現で、主人長屋王の客人をもてなす手厚さを表すと同時に、長屋王を指す表現として、「公讌」詩の「公子」を高官の意を表す「君侯」に置き換えている。このような田中浄足詩に見られる「公讌」詩受容の意識を踏まえれば、もう一つの傍線部である第三句目の傍線シ「西園開曲席」は「公讌」詩の傍線コ「清夜遊西園」を意識した可能性が想定される。「西園」という表現自体は曹丕の「西園之遊」に関連する他の詩作にも見られる語であるが、田中浄足詩に既に「公讌」詩受容の意図がうかがえることから、当該詩の「西園」も主に「公讌」詩を念頭に置いたものと思われる。ここの「西園」も、山田三方詩序と同じく長屋王宅での宴を積極的に曹丕が催した「西園之遊」に重ねた表現と見受けられる。

また、傍線ソ「霞色泛鸞觴」は具体的に「公讌」詩の詩句を受容しているわけではないが、傍線セ「君侯愛客日」の対句であることと、当該句では朝焼けを意味する「霞色」という表現が用いられて

いるのは、愛客疲れを知らない長屋王の宴が、終夜にわたって行われ、ついに明け方を迎えたことを示すものと思われる。その点からは、「公讌」詩の二句目の傍線ケ「終宴不知疲」が自ずと想起され、当該句は長屋王が曹丕同様に疲れを覚えず詩宴を催したことを表しているものと思われる。

続いて、曹植「公讌」詩を受容していると思われる詩作は、長屋王自身の作である「於宝宅宴新羅客」詩（六八番、以下長屋王詩と略す）である。長屋王詩の本文は次のとおりである。

長屋王「於宝宅宴新羅客【賦得煙字】」（六八番）

高旻開遠照、遙嶺靄浮煙。夕有愛金蘭賞、^チ無疲風月筵。

桂山餘景下、菊浦落霞鮮。莫謂滄波隔、^ツ長為壯思篇。

（高旻遠照開き、遙嶺浮煙靄き。金蘭の賞を愛でてこそ有れ、

風月の筵に疲ること無し。桂山餘景下り、菊浦落霞鮮らけし。

謂ふこと莫れ滄波隔つと、長く為さむ壯思の篇。）

長屋王詩において曹植「公讌」詩の表現を踏まえていると思しい箇所は、井実充史氏が指摘する傍線タ「有愛金蘭賞」と傍線チ「無疲風月筵」の二句である。井実氏は当該二句の「愛」と「疲」の珍しい対の直接の参照もとは、根本に曹植「公讌」詩の初二句傍線ク「公子敬愛客」と傍線ケ「終宴不知疲」を置く初唐私宴の「冬日宴于庶子宅各賦一字得〇」詩群で、それが長屋王個人の詩作に見られ

る傾向と一致すると指摘している。長屋王詩では、客人を熱心にもてなす姿勢と、疲れを覚えずに宴を催す自身の心情を表し、「公讌」詩に用いられた「有愛……、無疲……」という表現を用いながら、自身を「公讌」の主催者である曹丕に重ねていることは明白な事実と言える。

井実氏の指摘するように長屋王詩表現の背景には、曹植「公讌」詩があったことに間違いないが、「公讌」詩受容の傾向は長屋王詩に限られるものではなく、本論文で分析を行ってきた山田三方詩序と田中浄足でも確認されている。また、曹丕の宴に擬える初唐私宴は「冬日宴于庶子宅各賦一字得〇」詩群に限られるものでもない。

初唐の高正臣宅で催された「晦日宴高氏林亭」（以下「高氏宴詩」と略す）の序文には、「夫天下良辰美景……魏室群公、独擅鄴中之会（夫れ天下の良辰美景……魏室の群公、鄴中の会を独擅す。）」（陳子昂「晦日宴高氏林亭」序、『全唐詩』卷八四）とあり、高正臣の宴を曹丕主催のものに擬えている。さらに、序文冒頭にある「夫天下良辰美」は、謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首」（『文選』卷三〇）の序に見られる文言を踏まえた表現で、後文で詳細に論じることが正明氏は謝靈運序に曹丕の君臣和楽の理念の存在を指摘する。少なくとも、「高氏宴詩」には曹丕詩宴に擬える傾向に加え、謝靈運序で唱えられている曹丕を中心とした文人達の作詩理念が内包されていることになる。山田三方詩序・田中浄足詩・長屋王詩に見られた「長屋王宅詩宴」を曹丕詩宴に擬える意識は、幅広く同様の傾向を有す

る「冬日宴于庶子宅各賦一字得○」詩群や「高氏宴詩」などの初唐私宴から学んだものと思われる。

以上の三作の分析を通して、長屋王を曹丕に擬えようとするのは、山田三方・田中浄足・長屋王の三者に共通する認識であったことが明らかとなった。井実氏の別稿⁽⁶⁾によれば、山田三方詩序は養老三年（七一九）閏七月の作で、長屋王詩は詩題から分韻形式を用いた場での作であることがわかり、養老七年（七二三）八月の作と推定されている。田中浄足詩は詩題から長屋王在世中の晩秋に詠作されたものであることが明らかであるため、最も遅い時期で考えると神亀五年（七二八）九月の作ということになるが、具体的な詠作時期は明らかではない。しかし、少なくとも長屋王を曹丕に擬えようとする傾向は、山田三方詩序などから「長屋王宅詩宴」の他の参宴者、長屋王本人にも共有されるようになった共通認識であったと思われる。

懷風藻における曹植「公讌」詩受容は、山田三方詩序・田中浄足詩・長屋王詩から確認されたが、三作では曹植「公讌」詩以外にも、曹丕周辺の詩作の表現を受容したと思しい痕跡が見受けられる。そして、それらの詩作は、曹丕が魏文帝として即位する前の五官中郎時代に詠作されたもの、または五官中郎時代を想定して擬された作が中心となっている。本論文では、それらの詩作を「建年期曹丕関連詩宴詩」と称し、次節で詳細に考察を行いたい。

二 三作からうかがえる

建年期曹丕関連詩宴詩表現の痕跡

山田三方詩序が、傍線ア「君王以敬愛之冲衿」の一句で、「公讌」詩の初句である傍線ク「公子敬愛客」を踏まえていることは前節で述べたとおりであるが、主人が賓客に対し敬意と親しみの心を以つてもてなしたことを表す「公子敬愛」という表現は、曹植「公讌」詩に限らず、同じく曹植「公讌」詩を意識した、応場の「侍五官中郎将建章台集詩」にもうかがえる。

公子敬愛客、樂飲不知疲。

（公子客を敬愛し、樂飲して疲るるを知らず。）

（応場「侍五官中郎将建章台集詩」『文選』卷二〇）

応場詩の題にある「五官中郎将」は先述したとおりその時の曹丕の官名であり、曹植「公讌」詩に加え、「公子敬愛客」という一句と「公子」と称される曹丕との関りの深さを示している。山田三方詩序では「公讌」詩の「公子」を「君王」に置き換えているが、江淹が曹丕周辺の建安詩人等の作に擬した「雜体詩三十首」（『文選』卷三一）には、次のような「君王」を用いた表現が見受けられる。

君王礼英賢、不吝千金壁。

(君王は英賢を礼し、千金の壁を吝しませず。)

(江淹「雜體詩三十首 陳思王(贈友)曹植」『文選』卷三一)

懷風藻詩人等の曹丕関連詩宴詩の受容が、建安文壇を構成する諸文人等の作に留まらず、後世の擬建安文学の作にも及んでいた可能性を示している。

次に、山田三方詩序の傍線カ「既舞蹈於飽徳之地」という一句に注目したい。「飽徳」は毛詩に由来する表現である。

既醉以酒、既飽以德。君子万年、介爾景福。

(既に酒に酔ひ、既に徳に飽く。君子万年、爾の景福を介へよ。)

(「毛詩」「大雅・既醉」)

「既醉」の小序には「既醉」、大平也。醉酒飽徳、人有士君子之行焉。「既醉」は、大いに平らぐなり。酒に酔ひ徳に飽くれば、人は士君子の行ひ有るなり。」とあり、本来は優れた治世に恵まれていることを強調する表現である。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首 平原侯植」(『文選』卷三〇)にも、この小序を踏まえた表現がうかがえる。

朝遊登鳳閣、日暮集華沼。傾柯引弱枝、攀条摘蕙草。徙倚窮騁

望、目極尽所討。西顧太行山、北眺邯鄲道。平衢修且直、白楊信裊裊。副君命飲宴、歡娛写懷抱。良遊匪晝夜、豈雲晚与早。衆賓悉精妙、清辭灑蘭藻。哀音下回鶻、餘哇徹清昊。中山不知醉、飲德方覺飽。願以黃髮期、養生念將老。

(朝に遊びて鳳閣に登り、日暮れて華沼に集る。柯を傾けて弱枝を引き、条を攀ちて蕙草を摘む。徙倚して騁望を窮め、目極りて討ぬる所を尽くす。西のかた太行の山を顧み、北のかた邯鄲の道を眺む。平衢は修くして且つ直く、白楊は信に裊裊たり。副君は飲宴を命じ、歡娛して懷抱を写くす。良遊は晝夜に匪ず、豈云はんや晩と早と。衆賓は悉く精妙にして、清辭もて蘭藻を灑ぐ。哀音は回鶻を下し、餘哇は清昊に徹す。中山にも酔ふを知らず、徳を飲んで方に飽くを覚ゆ。願はくは黄髮の期を以て、生を養ひて將に老いんと念ふ。)

(謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首 平原侯植」『文選』卷三〇)

右の謝靈運詩を詳細に見ていくと、特に傍線を附した箇所の内容から見れば、「衆賓悉精妙」で賓客の素晴らしさが描かれ、「清辭灑蘭藻」で記されるように素晴らしい創作が行われ、「飲德方覺飽」の主人の恩恵に深く浸ったという語りの流れとなっている。同じく山田三方詩序においても、長屋王宅に招かれた賓客の素晴らしさを表す傍線イ「琳琅滿目、蘿薜充筵」の後、一座では傍線ウ「清談振発」と高尚な話が起こり、傍線エ「流彩別愁之篇」で素晴らしい詩

作が創作され、傍線カ「既舞蹈於飽德之地」で主人の恩恵にあずかったことが語られている。兩作におけるこのような叙述の一致からすれば、山田三方詩序の「飽德」は、毛詩の序よりもむしろ、直接には謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首 平原侯植」を意識していた可能性が高いと思われる。

次に、田中浄足詩ではどうか。先に述べたように、田中浄足詩の傍線セ「君侯愛客日」では、「公讌」詩の「公子」を「君侯」という表現に置き換えているが、「君侯」という表現は、時に五官中郎将であつた曹丕に贈られた劉楨詩にも用いられている。

涼風吹沙磧、霜氣何皚皚。明月照綈幕、華灯散炎輝。賦詩連篇章、極夜不知歸。君侯多壯思、文雅縱橫飛。小臣信頑鹵、僂俛安能追。

（涼風は沙磧を吹き、霜氣は何ぞ皚皚たる。明月は綈幕を照らし、華灯は炎輝を散ず。詩を賦して編章を連ね、夜を極めて帰るを知らず。君侯は壯思多く、文雅縱橫に飛ぶ。小臣は信に頑鹵、僂俛するも安んぞ能く追はん。）

（劉楨「贈五官中郎将四首」「其四」『文選』卷二三）

劉楨詩に見られる「君侯多壯思、文雅縱橫飛」の二句では、曹丕が大いにその文才を披露する姿が描かれ、その多才な主人を指すのがまさに「君侯」という表現なのである。「長屋王宅詩宴」に列席

した田中浄足は、宴の主催者である才能あふれる主人長屋王に、劉楨詩で描かれる文才を大いに披露した曹丕の姿を重ね、「公讌」詩の傍線ク「公子敬愛客」の「公子」を「君侯」という表現に置き換えたものと思われる。

さらに、田中浄足詩の四句目「東閣引珪璋」の「東閣」は、曹丕ゆかりの語を用いた表現と考えることができそうである。『芸文類聚』卷二三「人部・鑑戒」所収の曹丕「戒盈賦序」に、「避暑東閣、延賓高会、酒酣樂作、悵然懷盈滿之戒、乃作斯賦。（東閣に避暑して、賓を延き高会す、酒酣にして作に楽しみ、悵然として盈滿の戒を懷ふ、乃ち斯の賦を作る。）と見え、『初学記』卷一〇「儲宮部・皇太子」には、「魏文帝集曰、為太子時、北園及東閣講堂、並賦詩命王粲・劉楨・阮瑀・応瑒等同作。（魏文帝集に曰く、太子為たりし時、北園及び東閣講堂にて、並びに詩を賦すに王粲・劉楨・阮瑀・応瑒等に命じて同ともに作る。）ともある。『初学記』所引の内容では、皇太子時代の曹丕が「東閣講堂」において、多くの文人たちとともに詩作を行ったことを述べている。従つて、「戒盈賦序」では曹丕が賓客を「東閣」に招き、詩宴を催したことが記されており、田中浄足詩の「東閣」もそれらの内容を踏まえた表現となっている。『芸文類聚』『初学記』では「東閣」「東閣」とあり文字に相違があるが、実は田中浄足詩の本文も懷風藻諸本で「閣」「閣」の異同がある。それは、『芸文類聚』『初学記』の諸本でも同様であつて、にわかにいずれかに定められないのだが、即位以前の曹丕にゆかりの場とし

て、「東閣」ないし「東閣」があったという理解にいまはとどめておく。

『隋書』の「経籍」項には、「魏文帝集十卷」と曹丕の別集の存在が記されている。具体的な日本への将来の記録は残されていないが、隋代になお存在していた曹丕別集が、日本にも伝来していた可能性は十分考えられることで、右の「東閣」で詩宴が催されていた状況も、日本知識人が知り得た範疇であつたと言える。

続いて、長屋王詩に見受けられる他の建安期曹丕関連詩宴詩の表現を踏まえた痕跡に注目してみたい。長屋王詩の結句、傍線ツ「長為壮思篇」は、前掲劉楨「贈五官中郎將四首」「其四」の傍線部を想起させる表現となっている⁽¹⁾。

劉楨の「贈五官中郎將四首」は、かつて病に伏した自分の所に見舞に來た五官中郎の曹丕に対する感謝の意を述べた四首の贈呈詩である。第一首では曹操に従い戰場を巡り詩宴に参加した際の喜び、第二首では自身が病に伏した際に曹丕が見舞いに訪れたことへの厚い感謝の意、第三首では目前の曹丕が率いる遠征に参加できないことへの嘆きが詠まれる。そして「其四」の詩は右で述べた三首と同時に詠作されたもので、目の前の曹丕との詩宴の様子を描いたものである。その内容を確認すると「其四」詩では、戦地に吹く寒々とした風が砂礫を飛ばし、霜であたり一面は白々と染められ、月の明るさが帷を照らし、帷の中の灯もまた光を輝かせている情景がまず描かれる。続いて、主君曹丕が夜が深まっても、立て続けに創作を

行った姿が示され、主君曹丕の思いが大いに溢れ、佳作が次々と生み出されたことが記されている。末二句ではその主君の文才に自身の力量が及ぶはずもないという憧れの意志が述べられる。

前述のとおり、劉楨詩の詩題にある「五官中郎將」及び詩句にある「君侯」は、何れも主君曹丕を指す表現となっている。その曹丕の文才の素晴らしさが、劉楨詩の傍線を附した四句で淋漓と描かれているのであるが、長屋王詩の傍線ツ「長為壮思篇」という表現は、まさに劉楨詩の四句を一句に凝縮した結果と言える。詳述すると、劉楨詩の「賦詩連篇章、極夜不知歸」二句は、主君曹丕が終夜にわたって絶えず文作を行ったことを述べているが、長屋王詩の「長為」はその二句と同じく長屋王詩が創作された詩宴で、長屋王をはじめとした宴席一同が、長くにわたって詠作を続けたことを表している。そして、劉楨詩の「君侯多壮思、文雅縦横飛」の二句は、曹丕の「壮思」の多さへの感嘆と、それらが優れた佳作となって詠じられたことを述べるが、長屋王詩の「壮思篇」の三字は長屋王をはじめとした宴席一同の「壮思」の「篇」を為したことが表現されている。したがって、長屋王詩の結句「長為壮思篇」は、右の劉楨詩の傍線四句を一句として表現したものと思われ、長屋王が自身と宴席一同を劉楨詩で描かれる多才な曹丕とその周辺の文人たちに重ねた意識の表れと言える。

三 曹丕に擬えられる長屋王像

ここまで確認してきた三作では、主に曹植「公讌」詩の表現を踏まえる工夫と、同じく積極的に各々が催された長屋王宅での詩宴を、「公讌」詩が描く曹丕主催の詩宴に見立てる意識がうかがえた。特に三作に用いられたのは、「公讌」詩の傍線ク「公子敬愛客」、傍線ケ「終宴不知疲」と傍線コ「清夜遊西園」の部分で、傍線ク「公子敬愛客」と傍線ケ「終宴不知疲」で詩宴の主人である長屋王を曹丕に重ね、傍線コ「清夜遊西園」で長屋王宅を曹丕宴の主催地「西園」に喩え、人物と会場の二面で長屋王宅宴を「公讌」詩の情景になぞらえようとしている。さらに山田三方詩序では、長屋王宅宴に列席する主人の長屋王とその賓客らを、曹丕とその周辺の文人に比する意図もうかがえ、同様に田中浄足詩でも積極的に「長屋王宅詩宴」を曹丕周辺の集まりに擬えようとしている。『文心雕龍』⁽¹²⁾卷六の「明詩」には、曹丕周辺の集まりに対して次のように評価している。

暨建安之初、五言騰踊。文帝陳思、縱轡以騁節、王徐応劉、望路而爭驅。并憐風月、狎池苑、述恩榮、敘酣宴。慷慨以任氣、磊落以使才、造懷指事、不求纖密之巧、驅辭逐貌、唯取昭晰之能。此其所同也。及正始明道、詩雜仙心。何晏之徒、率多浮淺。唯嵇志清峻、阮旨遙深。故能標焉。若乃応璩『百一』、獨立不懼、

辭譎義貞、亦魏之遺直也。

（建安の初めに暨んで、五言騰踊す。文帝陳思は、轡を縱つて節を騁め、王徐応劉は、路を望んで驅を争ふ。并れも風月を憐で、池苑に狎しみ、恩榮を述べ、酣宴を敘す。慷慨以つて気に任せ、磊落以つて才を使ひ、懷ひを造し事を指すに、纖密の巧を求めず、辭を驅せ貌を逐ふに、唯だ昭晰の能を取る。此れ其の同じき所なり。正始の道を明らかにするに及び、詩は仙心を雜ふ。何晏の徒は、率ね浮淺多し。唯だ嵇は志清峻にして、阮は旨遙深なり。故に能く標る。若し乃ち応璩の『百一』は、獨立して懼れず、辭は譎しく義は貞し、亦た魏の遺直なり。）

右の一文の大まかな内容は、曹丕及びその周辺に集う文人等の間では、氣骨を大いに有しながら、清風明月、遊賞の喜び、恩惠榮譽、宴飲の楽しみを詠み、技巧よりも思いを氣ままに述べ、才能を振るう詩風が共有されていたということである。「長屋王宅詩宴」を曹丕周辺の集まりに喩える背景には、このような建安詩風が「長屋王宅詩宴」にも表れていたことを強調する意図があったものと思われる。

長屋王詩では、長屋王が自身を「公讌」詩で描かれる「公子」であることを積極的を意識しているだけでなく、その結句「長為壯思篇」は、「贈五官中郎將四首」の「其四」で示されている、思いが豊富で文才豊かな曹丕を表す語句を、一句の表現に凝縮させた試みがう

かがえ、長屋王が劉楨詩で描かれる曹丕の存在そのものに自身を重ね合わせていることが確認される。つまり、三作で示されていたのは、客人を敬意と親しみの心を以って熱心にもてなし、夜が更けても疲れを覚えず宴を催し、絶えず溢れんばかりの思いを優れた文才で表す曹丕のような長屋王像なのである。そして、曹丕に擬えらるる長屋王像は、三作に限られない可能性がある。

調古麻呂「初秋於長王宅宴新羅客」詩（六二番）

一面金蘭席、三秋風月時。琴樽叶幽賞、文華叙離思。

テ人含大王徳、地若小山基。江海波潮靜、披霧豈難期。

（一面金蘭の席、三秋風月の時。琴樽幽賞に叶ひ、文華離思を叙ぶ。人は大王の徳を含み、地は小山の基の若し。江海波潮靜けし、霧を披くこと豈に期に難けめや。）

調古麻呂作「初秋於長王宅宴新羅客」詩（六二番、以下調古麻呂詩と略す）の第五句目には、傍線「人含大王徳」という一句が見受けられる。この一句にある「大王徳」という表現は、「人」で示される主人長屋王を賛美したものと思われる。しかし、「大王」が何を踏まえた表現なのかについては、諸注見解が分かれている。新釈は「長屋王は身皇統に係るを以て斯く言ふならん」、杉本注は「長屋王は身皇統の威徳を有し」とし、長屋王の身分に相応しい表現として「大王」が選択されたと述べる。そして、林新註は「大王」

の対に「小山」が用いられていることを踏まえ、「大」「小」の対は「王羲之、王献之」の大王小王を指し、書道のすぐれた技量を表すとしている。大野研究は、次句の「小山」を新釈が淮南王劉安のことを指すという指摘を踏まえ、対句関係で「大王」も人のことを指す表現であつた方が自然と考え、宋玉「風賦」で楚の襄王の雄風を「大王之風」と詠み、詩にも「大王」で楚の襄王を指す例が見られることから、楚の襄王説を打ち出し、小島大系・江口全訳注はこの見解に従っている。

一つの考えとして、この「大王」は曹丕を指す表現として理解することはできないだろうか。「大王」の対句表現である「小山」は淮南王劉安の文壇を意味する語である。「小山」を以て劉安を指すのは、次の『楚辞章句』「招隠士」の王逸の序にある「小山之徒」に由来する。

『招隠士』者、淮南小山之所作也。淮南王安、博雅好古、招懷天下俊偉之士。自八公之徒、咸慕其徳、而帰其仁、各竭才智、著作篇章、分造辞賦、寛類相從、故或称小山、或称大山。其義猶「詩」有「小雅」、「大雅」也。小山之徒、閔傷屈原、又怪其文昇天乘雲。闕使百神、似若仙者、雖身沈沒、名徳顯聞。与隠処山沢無異、故作「招隠士」之賦、寛章其志也。

（『招隠士』は、淮南小山の作る所なり。昔淮南王安は、博雅にして古を好み、天下俊偉の士を招懷す。八公の徒自り、咸く

其の徳を慕ひ、而して其の仁に帰し、各才智を竭くし、篇章を著作し、辞賦を分造し、寛類相ひ従い、故に或は小山と称し、或は大山と称す。其の義は『詩』に「小雅」、「大雅」有るが猶きなり。小山の徒、屈原を閔傷し、また其の文の昇天乗雲を怪しむ。百神を閔使し、仙者に似るが若く、身は沈没すと雖も、名徳顕聞にして、山沢に隠処するに異ること無きを怪しむ、故に「招隱士」の賦を作り、其の志を寛章するなり。」

調古麻呂詩では「小山」という表現を用いて、主人である長屋王を交えた目前の「長屋王宅詩宴」の列席者は、まるで淮南王劉安とその周辺の文士のように言っている。同じく「長屋王宅詩宴」で創作され、「小山」を以って「長屋王宅詩宴」を描写した山田三方詩序では、「小山丹桂、……長坂紫蘭」という対句表現が見られ、傍線オ「長坂紫蘭」は前述のとおり、曹植「公讌」詩の傍線サ「秋蘭被長坂」を意識したものである。つまり、山田三方詩序では、劉安の文壇と曹丕の文壇が対句形式で表現されているのである。

山田三方詩序の対句表現の在り方を考慮すれば、調古麻呂詩の「大王徳」は曹丕を指す表現で、やはり長屋王を曹丕に擬えようとした試みの表れと言える。現に史書には、魏王の称号を受け継いだ曹丕を「大王」と称する例が、『三国志』の延康元年六月庚午条「遂南征（遂に南征す）」の裴松之注所引『魏略』⁽²⁰⁾の「度支中郎将新平霍性上疏諫」に見られる。

臣聞文王与紂之事、（中略）今大王体則乾坤、広開四聡、使賢愚各建所規。

（臣聞く文王紂が事に与る、（中略）今大王体乾坤に則して、広く四聡を開き、規する所を建て賢愚を各々に使して。）

（『三国志』「魏書 文帝 紀第二」）

そして、漢献帝が文王曹丕に皇位を譲る内容が記された禪位の詔勅には次の内容が記されている。

（前略）是以前王既樹神武之績、今王又光曜明德以応其期（後略）

（是を以て前王既に神武の績を樹て、今王又た明德を光裕して以て其の期に応ず）

（『後漢紀』⁽²²⁾「献帝建安二十五年冬十月乙卯条」）

右の内容では、「今王」こと曹丕の「明德」が禪位の一つの理由として掲げられている。これらの内容を踏まえれば、調古麻呂詩の「大王徳」は曹丕の徳と理解出来得る表現である。

百済和麻呂「秋日於長王宅宴新羅客【賦得時字】」詩（七七番）勝地山園宅、秋天風月時。置酒開桂賞、倒屣逐蘭期。

人是鷄林客、曲即鳳樓詞。青海千里外、白雲一相思。

(勝地山園の宅、秋天風月の時。酒を置きて桂賞を開き、履を倒にして蘭期を逐ふ。人は是れ鷄林の客、曲は即ち鳳樓の詞。青海千里の外、白雲一に相思はむ。)

次に、右の百済和麻呂「秋日於長王宅宴新羅客【賦得時字】」詩

(七七番、以下百済和麻呂詩と略す)の「置酒」と「倒履」の対句関係にある二つの表現に注目したい。「置酒」は酒宴を設ける意で、詩によく用いられる表現である。

親昵並集送、置酒此河陽。

(親昵並びに集まり送り、酒を此の河陽に置く。)

(曹植「送应氏詩二首」「其二」『文選』卷二〇)

置酒高殿上、親友從我遊。

(酒を高殿の上に置き、親友我に従つて遊ぶ。)

(曹植「箜篌引」『文選』卷二七)

置酒高堂上、友朋集光輝。

(酒を高堂の上に置き、友朋光輝を集める。)

(阮瑀「詩」『芸文類聚』卷二七「人部十一・行旅」)

開館延群士、置酒于斯堂。

(館を開きて群士を延き、酒を斯の堂に置く。)

(応場「公宴詩」『芸文類聚』卷三九「礼部中・燕会」)

置酒飲膠東、淹留憩高密。

(置酒して膠東に飲み、淹留して高密に憩ふ。)

(謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首」「徐幹」『文選』卷三〇)

置酒坐飛閣、逍遙臨華池。

(置酒して飛閣に坐し、逍遙して華池に臨む。)

(江淹「雜體詩三十首」「魏文帝 遊宴 曹丕」『文選』卷三一)

しかし、時期的に早い「置酒」の用語例が右の諸例のように、建安期曹丕関連詩宴詩に集中する傾向があることは注目に値する。また、「置酒」の対句として用いられている「倒履」という表現は、建安七子の一人である王粲にまつわる故事に由来するものである。

獻帝西遷、粲徙長安、左中郎將蔡邕見而奇之。時邕才學顯著、貴重朝廷、常車騎填巷、賓客盈坐。聞粲在門、倒屣迎之。

(獻帝西遷、粲長安に徙る、左中郎將蔡邕見て之を奇とす。時に邕才學顯著、朝廷に貴重なり、常に車騎巷に填ち、賓客坐に盈つ。粲が門に在ると聞ひて、倒履して之を迎ふ。)

(『三国志』「魏書二十一 王粲伝」)

右の一文では、王粲が自宅の門前に至ったことを知り、蔡邕が熱心なあまり急いで王粲を出迎えた際、あわてて靴を逆さに穿いてしまったことが記されている。右の王粲の故事は直接曹丕との関りを

持ち合わせない内容ではあるが、建安期曹丕周辺の文人の性格を表すものであり、王粲が客人を丁重に扱う姿勢は、曹植「公讌」詩で描かれる、曹丕が疲れを知らずに客人をもてなすものと通じるところがある。客を重視する建安文壇の姿勢の表れと言える。

無論、懷風藻詩には待宴詩の表現や詩題などに他の「置酒」例も確認され、それらは右の諸建安期曹丕関連詩宴詩に見られる「置酒」とは関りが薄いものと思われる。しかし、百済和麻呂詩では、建安期曹丕周辺の詩宴詩に比較的用例数が確認される「置酒」という表現と、建安七子である王粲にまつわる「倒屣」という表現を対句で用いていることを考慮すれば、百済和麻呂は自身が列席していた「長屋王宅詩宴」を曹丕周辺の詩宴に見立て、建安期曹丕関連詩宴詩を念頭に「置酒」と「倒屣」の対句を用いた可能性が高い。そして、百済和麻呂は主人長屋王を、殊に応場の「公宴詩」などで描かれる、主君曹丕の姿に擬えようとしていたものと思われる。

したがって、長屋王を曹丕に擬えようとするのは、長屋王及び「長屋王宅詩宴」に列席した長屋王周辺の文人らによって共有された認識であったと思われる。これらの「長屋王宅詩宴詩」にうかがえた、建安期曹丕周辺詩宴詩表現の受容を通して長屋王を曹丕に擬えることは、一体どのような長屋王像を構築する目的があったのだろうか。それを読み解く鍵は、「長屋王宅詩宴」を構築していた理念にあるものと思われる。

四 「長屋王宅詩宴」の文作理念

辰巳正明氏は「近江朝文学史の課題」⁽²³⁾などをはじめ、上代日本文学、殊に近江朝文学の背景には、謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首」に記される曹丕の君臣和楽の詩観の存在を指摘する。辰巳氏の論は概ね次の通りとなる。

懷風藻の序文には、天智天皇の近江朝の文学状況が反映されている。そこでは文章と学問が重要視され、諸制度が整い、天皇が文学の士を招致し、天皇自身も詩を作り、賢臣たちも天皇を讃美する詩を献上したことが記されている。懷風藻序文に記される近江朝文学の在り方には、理想的な「君臣一体の詩観（謂わば、君臣和楽、君臣調和の道具としての詩のあり方）」が表れている。時代と状況は異なるが、古今集真名序にある「古天子、每良辰美景、詔侍臣預宴筵者、献和歌。君臣之情、由斯可見、賢愚之性、於是相分。所以随民之欲、扱士之才也。」に語られるように、理想とされる天子は良辰美景のたびに遊宴を開き、臣下に和歌を献上させるものである。実際懷風藻に残される近江朝の作である大友皇子の「侍宴」詩からは、君臣和楽が実現された遊宴が催され、まさに理想的な君臣関係が成り立っていたことを意味する。そして、そのような君臣和楽の理念は漢詩に留まらず、万葉集所収額田王の「天皇、詔内大臣藤原朝臣、競春山万花之艷秋山千葉之彩時、額田王、以歌判之歌」(卷一・

一六)にも表れ、和歌にも及んでいる。これらの近江朝の文学に表れる君臣和楽の具体的な詩観は、謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首」の序文に記される「建安末、余時在鄴宮、朝遊夕讌、究歡愉之極。天下良辰・美景・賞心・樂事、四者難並。今、昆弟友朋、二三諸彦、共尽之矣。(建安の末、余は時に鄴宮に在り、朝に遊び夕に讌し、歡愉の極を究む。天下の良辰・美景・賞心・樂事、四者は並せ難し。今、昆弟友朋、二三の諸彦と、共に之を尽せり。)」に体现される曹丕を中心として実現された君臣和楽の理念に由来するものと辰巳氏は論じている。つまり、謝靈運作に記される、曹丕とその周辺の文人等で形成された君臣和楽の理念は、近江朝の文学の根底に置かれ、その影響は漢詩のみならず和歌にも及び、後世に受け継がれ、古代日本文学における広範囲での影響を辰巳氏は説く。

更に辰巳氏は「長屋王宅詩宴」について、次のように指摘する。

おそらく、古代日本に漢詩がもたらされて、日本人がはじめて漢詩を詠むようになるその最初は、このような詩の理念(※本論文執筆者注・右の謝靈運詩序に見られる、良辰・美景・賞心・樂事で実現される君臣和楽のこと)に基づいたのだと思われる。『懷風藻』に残された漢詩を見ると、それらが宮廷文学として成立している背景には、こうした君臣和楽の理念の中に詠まれていることが知られるのであり、長屋王邸の文学もそうした性格を強くもっている。⁽²⁴⁾

しかし、曹丕周辺詩宴詩表現の受容は、明らかに「長屋王宅詩宴詩」に集中する傾向にある。本論文で扱った諸作に対する考察でも確認できたように、曹植「公讌」詩の表現を踏まえた痕跡は、山田三方詩序・田中淨足詩・長屋王詩の三作が最も明確であり、同時に三作には他の建安期曹丕関連詩宴詩表現を受容した痕跡もある。そして、それらの作には長屋王を積極的に曹丕に擬えようとする意図が表れており、その趣向は三作以外の「長屋王宅詩宴詩」からも同様にうかがえる。宴の主人を曹丕に擬え、自身または宴の参宴者を曹丕周辺の文人に見立て、目前の集いを建安文壇の再現として捉える意図は、「長屋王宅詩宴」に集中してうかがえるものと言える。前掲『文心雕龍』の建安文学への評価でも明らかであったように、建安文壇に共有されたものは、謝靈運詩序で述べられた「天下良辰美景、賞心樂事」という耽美な作詩傾向だけでなく、気骨を大いに有しながら、技巧よりも思いを気ままに述べ、才能を振るう詩風であったものと思われる。そのような建安詩風の継承と再現を試みた「長屋王宅詩宴」の性質について、井実氏に次のような論が見受けられる。

上代に催された詩宴は公宴と私宴の二つに大別される。公宴は君臣和楽を理念としつつも、実質的には、臣下が一方的に皇徳を称揚するものであった。他方、私宴は同志交遊を理念とし、

当の宴集を高士たちの集いと見なした。これら相對する二つの宴集詩に対して、長屋王私邸である作宝邸の宴集詩は君主を稱揚する表現と同志交遊の理念に基づく表現が混在していた。それは作宝邸の宴集の主催者を風流王に擬えていたからである。風流王主催の宴では、現実の君臣関係はそのままにして、理念の世界のみで同志交遊が目指されたのである。風流化された君臣和樂とも言えよう。⁽²⁵⁾

右の井実氏の論によれば、「長屋王宅詩宴」では現実世界では「君臣」関係という形式をとりながらも、理念の世界では「同志交遊」を目指していたこととなる。「長屋王宅詩宴」の理念の世界での趣きに対する井実氏の指摘は妥当と思われ、本論文で確認してきた「長屋王宅詩宴」における建安期曹丕関連詩宴受容の傾向は、井実氏の指摘する「現実」と「理念」の在り方に基づくものと思われる。「長屋王宅詩宴」の作者等によって、建安文壇の再現として位置づけられる「長屋王宅詩宴」こそ曹丕の理念の核を実現した文壇であったと言える。

前述のとおり、曹植「公讌」詩は、曹植が兄曹丕主催の詩宴に列席した際の作である。そして、曹植「公讌」詩は、曹丕が文帝として即位する以前、五官中郎であった時期であった。井実氏は長屋王詩の曹植「公讌」詩を踏まえた「有愛…無疲…」の表現について次のように指摘する。

主人が客人を敬愛し疲れも知らずに歓待し尽くすという盛宴賛美は、その後に類型化されていったようで、「愛、客不告疲、飲讌遺景刻（客を愛して疲れを告げず、飲讌して景刻を遺る^{わす}）」（謝靈運「擬魏太子鄴中集詩 陳琳」、『文選』卷三〇）、「遊人惜將晚、公子愛忘疲」（遊人將に晚れむとするを惜しみ、公子愛して疲れを忘る）（初唐・盧照鄰「宴梓州南亭得池字」）など曹植・応場の詩句を襲った表現が詠まれていく。長屋王もまた、（中略）客人たちを深く敬愛しとことん厚遇したいという思いを伝えようとしたのであろう。そこには、この佐保邸の宴も曹丕文苑の風雅を受け継ぐものであるとの自負が込められている⁽²⁶⁾。

つまり、長屋王が自ら進んで自邸で催された「長屋王宅詩宴」を「曹丕文苑」に擬えたように、曹丕とその周辺の文人等によって構築される詩風にあこがれる「長屋王宅詩宴」の三作にとって、建安詩風の表れである建安期曹丕関連詩宴詩はこの上ない参照対象となったことに違いない。

おわりに

本論文では、山田三方詩序における曹植「公讌」詩表現の受容を

きつかけに、懷風藻詩に見られる曹植「公讌」詩受容について考察を行った。その結果、曹植「公讌」詩受容は、山田三方詩序・田中淨足詩・長屋王詩の三作に顕著に表れており、曹植「公讌」詩受容が「長屋王宅詩宴」に集中していることを明らかにした。

曹植「公讌」詩を受容した三作は、何れも長屋王宅で催された詩宴に因んで創作されたもので、三作とも「公讌」詩の他にも建安期曹丕関連詩宴詩の表現を用い、積極的に長屋王を曹丕に擬えようとする意図が表れている。このような意図は他の「長屋王宅詩宴詩」にも痕跡がうかがえ、長屋王を曹丕に擬えようとするのは、長屋王及び「長屋王宅詩宴」に列席した長屋王周辺の文人らによって共有された認識であったことが明らかとなった。

注

- (1) 林宇「懷風藻」山田三方作詩序の表現から見る長屋王宅詩宴（『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第68輯』、早稲田大学大学院文学研究科、二〇二三・三）。また、本論文の引用本文に施した傍線などは論文執筆者によるもので、便宜上五十音順に太字を用いて分別を行い、引用文の内容に沿って対句関係が明確となるよう適宜改行を行った。字体は私に通行字体に改めた。以下同。
- (2) 本論文における『文選』の詩や序の本文及び書き下しは、内田泉之助・網祐次著『文選（詩篇）上』（新釈漢文大系14、明治書院、一九六三・一〇）及び、網祐次著『文選（詩篇）下』（新釈漢文大系15、明治書院、一九六四・一二）に依拠した。以下同。
- (3) 本論文で用いた山田三方詩序以外の懷風藻詩の本文及び訓読は、小島憲

之「懷風藻」（日本古典文学大系69、岩波書店、一九六四・六）に従った。以下同。

- (4) 井実充史「懷風藻」長屋王の詩三首について：作詩手法と表現開拓（『福島大学人間発達文化学類論集』第39巻、福島大学人間発達文化学類論集、二〇二三・七）。
- (5) 辰巳正明「万葉集と中国文学 第二」（笠間書院、一九九三・五）など。
- (6) 井実充史「於長王宅宴新羅客」詩の論（『上代文学』第73号、上代文学会、一九九四・一一）。
- (7) 「毛詩」の本文及び書き下しは、石川忠久著『詩経 下』（新釈漢文大系112、明治書院、二〇〇〇・七）に従った。
- (8) 「芸文類聚」（上海古籍出版社、一九九九）。以下同。
- (9) 「初学記」（中華書局、二〇〇四）。
- (10) 「隋書」（中華書局、二〇一九）。
- (11) 井実氏は、前掲注（4）論文で、長屋王詩の「壮思篇」は、劉楨「贈五官中郎將四首」其四に「着想を得た」と指摘した上で、「このように曹丕の文才を想起させる表現を結句にもってくるほど、長屋王は彼に傾倒していたのである。」と指摘しており、井実氏の見解は妥当と思われる。
- (12) 劉勰「文心雕龍」（中国書店、二〇一八）。
- (13) 釈清潭「懷風藻新釈」（丙午出版社、一九二七・一一）。以下同。
- (14) 杉本行夫「懷風藻」（弘文堂、一九四三・三三）。
- (15) 林古溪「懷風藻新註」（明治書院、一九五八・一一）。
- (16) 大野保「懷風藻の研究：本文批判と註釈研究」（三省堂、一九五七・二）。注（3）小島氏書。
- (17) 江口孝夫全訳注「懷風藻」（講談社学術文庫1452、講談社、二〇〇〇・一〇）。
- (18) 王逸撰、黄靈庚点校「楚辞章句」（上海古籍出版社、二〇一七）。
- (19) 「魏略」原書は散逸。「三国志」の裴松之注に多く引用が確認される。
- (20) 「三国志」の本文及び書き下しは、「三国志」（中華書局、一九五九）に依る。一部書き下しは、渡邊義浩編『全譯三国志』（汲古書院、二〇二一）

などを参照した。以下同。

- (22) 『後漢紀』の本文及び書き下しは、中林史朗・渡邊義浩訳『後漢紀』（中国古典新書統編^②、明德出版社、一九九九・四）に従った。

- (23) 注(5)辰巳氏書。第三章。

- (24) 辰巳正明「5作宝楼の文学 君臣和楽の理念」『悲劇の宰相長屋王』（講談社、一九九四・六）。

- (25) 井実充史「君臣和楽と同志交遊と——『懷風藻』宴集詩考」（辰巳正明編『懷風藻 漢字文化圏の中の日本古代漢詩』、上代文学会研究叢書、笠間書院、二〇〇〇・一一）。

- (26) 注(4)井実氏論文。